内容が内容だけに新聞の雜報や講談小說のやうに誰にでも分る樣にとは行くまい。自分の先輩菜氏が嘗て中學生時代に誰かの哲學概論の譯書を人から借りて來て三國志でも讀む氣で繙いて見たが第一頁の初から概念とか範疇とか其當時の中學生の學力では全く分らない語にぶつつかつて嘆息して卷をおいた事が今でも同人間の笑話になつて居る。今日の學生は一般に進んで居るからこの樣な事はないだらうが然しそれにしても此種の書物はある程度以上に平易に叙述する事は内容の性質が許さない所である。

又もう一つの困難は日本には種々の哲學史的の聯想の伴ふて居る一定の哲學的術語といふものがない事である。勿論明治の初、學界の先覺達が西洋から術語を輸入して經書や佛典から得來つた譯語によつてこれをあらはし今日廣く一般に行はれて居るのも少くはない。然しまだ〳〵改良を要する生硬の譯語や又同一の事柄を十人十色樣々な語によつてあらはさうとして居るのも少くない。これは何も特に本書について云ふのではない。只こういふ次第であるからありふれた仕方ではあるが卷尾に初學者のために和獨對照の語彙をつけるだけの親切が欲しかつた。

之を要するに本書は哲學入門の士の一讀すべきはもとより、然らざる者もウインデルバンド、リツカートを中心とせる西南獨逸派の學說の一班を窺はんと欲するの士に大に推擧するの價ある近來の良著である。妄評多謝　岩波書店發行　價一圓二十錢

（勝部謙造）

プラグマテズムの倫理說

文學士　福井晋太郎著

近代の末葉より現代に亘る西洋倫理學史を研究せんとする著者の企圖の一部分として、昨年の哲學雜誌に掲載せられた論文を、少しく修正し、更に「絕對的道德と不滅の觀念」の一章を增補されたものである。主觀主義、相對主義に陷るプラグマテズムが絕對的道德を認めたか如何かといふことや、宗教との提携厚き實用主義に於いて、不滅の論は蓋し見逃し難いからであらう。

最初に認識論としてのプラグマテズムを概說し、進んで此の論の上に立つた倫理說の立場を明かにし、道德的理想論に入つて居る。一昨年の哲學雜誌に Horne, Free Will and Human Responsibility の紹介を連載せられた著者の論述は、自由意志論に移つて更らに詳細である。續いて、意志の自由を主張する點より將さに向ふべき改善說を論じ、「道德的行爲と知的作用」との關係を吟味し、「絕對的道德と不滅の觀念」に轉じ、「餘論」の章下に、實用主義者の唱ふる倫理說の批評を試みられて居る。

新方面を拓いて貢獻する處大なるプラグマテズムの倫理說に關する此の著述が、單行本として出版せらるゝに到つたのは、プラグマテズムの倫理說を知らんとする者には勿論、プラグマテズムそのものを研究せんとする人に取つても、尠からざる便利なことである、usefulなことであると思ふ。（尾生光三郎）東京市京橋區南傳馬町二丁目、目黑書店發行　菊版一九五頁　定價六十錢